

第3部◎ディスカッション

いのち、あそび、共に生きる

パネリスト

最首 悟・小林芳文・野中浩一

堂前（司会）：これより、司会は私、堂前がやらさせていただきます。よろしくお願いたします。シンポジウムの第3部としてパネルディスカッションを始めます。本日はパネラーとして和光大学の名誉教授、最首悟さんにお越しいただきました。小林芳文さんと野中浩一さんに加わっていただき、このお三方で進めていきます。最首さんは2007年に和光大学を定年なさったんですけど、その時期は、まだ身体環境共生学科が計画段階で、最首さんには、それ以前からなさっている水俣病や障害をふくめた、いのちに関するご研究から、学科のコンセプトへのご助言をいただきました。本学科のコンセプトとして「共生」というものをもう一度考えていくうえで、またいろいろお話をうかがえればと思ってお招きいたしました。

まず、いのち学、あるいは、いのち論という形で最首さんが日頃おっしゃっていることを、第1部、第2部の感想を含めて少しお話いただきたいと思います。

最首：わかりました。最首です。時間がほとんどなきに等しいというべきです（笑）。でも、注文がいっぱいついておりまして、まず、第1部、第2部の感想から、ということで……。

——根本的な「雑」

今日はすごかったです。盛りだくさんで、疲れる暇がありません（笑）。しかしそれが、そもそも共生みたいなことを示しているのですね。みな、共生を掲げながら、雑然としています。野中さんのお話を聞いていると、この「雑」というのが非常に大事だという点に絞られてきます。共生学とは英語で何と云うか、みなさん苦勞されているようですが、多分、まだない。「雑」というと、たとえば雑

録とか、雑炊とか、いろんなものがごたませに入っている。そういうのをミセラニーといいます。私は、ミセラニアンという感じか。つまりは雑学みたいなもので、また、それではなくてはいけないと思っているから始末におえないところがありますが……。オロジーとかグラフィのほうはみんな「イスト」がやる。ピアニストとかバイオリニストとかデンティストとか。「イアン」は、ミュージシャンとか、総合的な内科医を意味するフィジシャンとか、「一般」のほうです。ところが一般学というのがあんまりない。オロジーをつけるわけにいかないのです。「イスト」は、オロジー、グラフィへと個別に分化させて、どんどん専門をせばめ、深くしていくと思っ

ている。思っている、などという言い方はちょっと皮肉っぽいですが。

それに対してどうして「雑」を言うかという、これが、日本列島とだいぶかかわっています。一言だけ言いますと、加藤周一かとうしゅういちの『雑種文化』という本があります。副題は、日本の小さな希望です。私はこの雑種をハイブリッドだとばかり思っていたのです。ずーっとそのつもりで解釈してたのですが、このところもう一回アタックしてみると、どうもそうでもない。加藤周一自身がまた、このことに気づいていないんじゃないか、と思うようになってきました。非常におそれ多いことですが。というのも、加藤周一が、「根本的な雑」とか「徹底的な雑」というのをくり返すのです。これ何だろうか。つまり、純と純、異質の純と純が混じって、ハイブリットが出来ました、というような話ではないんです。根本的に雑、徹底的に雑なのです。しかもそれが実は和をつくる。

いのちのほうから言いますと、いのちというのは、私たちはまだ解明できる論理、認識をもっていないけれども、てんでばらばらに

雑然としていてなお秩序がとれている。これは日本的和の原点でもありますが、そういう有様がいのちの姿なんですね。黒板に書いた「雑」、つまり、雑草というのが一番いい。私たち人間は雑草を飼えない。雑草研究者は、雑草を飼育することができないから非常に困ってしまいます。飼育したとたんに雑草じゃなくなってしまうから……。いのちというのはそういうものでしょう。純というのは、ベクトルが（ベクトルって方向性をもった量です）一定方向を向いた秩序の高さを表していて、それに対して、雑然というのは秩序が一番低い状態です。いっぱいある小磁石のNとSの向きがみんなばらばらでいて、なんともならないけども平穏である。和である。徹底的に雑、というのは多分こういう状態を意味している。共生学というときには、そのような概念ももちこんで、ネーミングに苦労しなくてはいけないのではないか、と思うのです。

——異質が雑多にいる

第1部と第2部ではいろいろな取り組み方があったわけですけど、「異質」ということ



では、たとえば、澁谷さんが仏教的世界を言われた。私は、大きくは3つの一神教や仏教をまとめていくには、たぶんいのちとしか言いようがないだろうと思うのですが、そのなかで一番、食べることに意を払って、そしていろんなものが雑多にいる、ということでは、仏教世界は非常に大事なわけで、澁谷さんはそういう世界を言われました。

——「遊」の隙間

みんな、それぞれ共生にかかわってくるわけですが、その根本にはいのちをおくしかい。そしていのちとはなんだという、具体的には、生きものというのをみているとふつう何もしない。これは川那部浩哉さんという生態学者がずっと言っていることで、『曖昧の生態学』にその考えが表れています。だいたい生きものが何かの関係性をもって、私たちの観察にひっかかってくるのは異常事態、生存の危機のときが多く、そのような状態を指して生きものというわけにはいかないだろう。生きものというのはだいたい何にもしない。全体のことを考えているわけじゃなし、ただ、ゆらゆらしている。あ、やっと「遊」に入ります(笑)。

黒板に書いた2番目の「遊」、遊ぶの原字です。もっと原字はさんずいに子どもの子と書く。水のなかでゆらゆら浮かんでいる。根なしである。つなぎとめられてない状態が「遊」。そして何をしているのだから、目的もなさそう。陸に上がると、足で動き回るといふしにゆうのほうに変わっていった。それで、「に遊ぶ」という言い方が出てきたわけですね。「に」というのは場所性を表す、浄土に遊ぶ心、といったふうな。

私の娘の星子^{せいこ}は33歳になりますが、ほんと

に何もしない。目が見えないし、しゃべらないし、ごはんはひとりで食べないし、排泄はもちろん人任せだし、動かないし。何もしないし、したくないのですが、なんととっても、水のなかにはいって浮き輪にはまってゆらゆらしているのが一番好きなのです。それを見ていると、なんだろうなあと思うことがありますね。

そういう「遊」という世界、つまり無駄で空回りする世界。スラックとかアイドリングとか。ぼくらははいているスラックスのように、隙間があること。この隙間というのが大事なんでしょう。ぎちぎちかみあっていない。共生というのは、大きく言うと、かみあってしまった、無駄をゆるさない、合理的なメカニク社会への批判であり、それを抜け出した社会を目指さすという目的志向でしょう。端的に言えば、ゆとり、無駄を導入していかなくてはならない。そういうことの大事さを、「遊」は教えるわけですね。

——「ひとりで、ひとりでに」から「ゆ」へ

いちばん大事なのは、ひとりで、ひとりでに、ということ。これを強調したのは福田定良^{ふくださだ}(ていりょう)という哲学者です。『私と哲学とのおかしな関係についての告白』という長い題名の本があります。定良さんにことよせれば、ひとりで、ひとりでに、というのが遊ぶことであって、そのとき周りみんな身を引いていかななくてはいけない。身を引いていって、ひとりにさせる、そういう状態を「遊ばす」とか「遊ばされる」とかいう。この言い方がなぜ敬語になったかということが面白いですね。ひとりで、ひとりでに、という状態をつくりだすために私たちが配慮する。とくに教師はそれを配慮しなくてはならない、と言うのがデューイで、教師は場を用意する

と言いました。デューイをひきついで、大正自由教育の奈良師範きのしたたけじの木下竹次さんは、もっとズバッと、教師は環境である、教師は環境に化さなくてはいけない、と言った。そこで子どもたち、学生たちが遊ばされる。いのちが大事にされている表れです。天子をあそばす、天子があそばされる、それが敬い、尊敬の言い方に転じる、というようなことを西谷啓治という宗教学者が言っています。

黒板に書いた「游」の次が「ゆ」です。「ゆ」というのは、あら き ひろ ゆ き荒木博之という国文学者によれば、日本的には非常に大事で、温泉の湯に通じている。「ゆ」はいのちなのです。「ゆ」にはじまる言葉は、全部いのちにかかわってきそうです。たとえば「ゆっくり、ゆるむ、ゆったり、ゆるぐ、ゆらぐ、ゆする、ゆさゆさ、ゆうゆう、ゆたか、ゆらゆら、ゆめ」。いいでしょう？ これは私が「新任の先生へ」という文章でつくったものです。曲をつけてくれるという人がいて、でも、まだつけてくれません(笑)。この「ゆ」が小林さんの世界、ゆらゆら、ゆらんこ。

——「雑」と「オロジー」との相性

というところで、野中さん、さっきの「雑」、ミセラニーはどうですか。

野中：ふだんの学生の気分にさせられているような……(笑)。そうなんです、そうするともう徹底的にオロジーじゃないんですよ。さっき言いましたけど、それでも日本では「学」って呼んでいいんじゃないか、一方でそう思っているんです。だけどそのときに、学生に「学」を教えるということはもはやできない。正直なところ、矢田さん、堂前さん、大橋さん、あるいは芳文さんあたりのお話を

聞いていても、教師がコントロールなんかしていないんです。学生たちの力が自動的にやっている。せいぜい場づくり、といったらそうした方たちには失礼かもしれないけど、少なくとも首根っこつかまえてどうこうできるようなものじゃないものを学生たちがみずからやっている。それはたぶん今の私自身の生き方にも大きな影響を与えているんですが、でもどこか、「学」というには躊躇があるというのが正直なところですよ。

——「共生」が対峙すべきもの

最首：はい。上野さんのお話が非常に大事で、「共生」というのは、ほんとにこう、ぞっとするようなところがあるんです。私も73歳です。共生は、むしろ、ひとつにまとめる秩序を意味していた。しかし、それは死ぬということ、つまり一億総玉砕でしかまとめられなかった、ということです。しかもアジアをそれでまとめようというのですから、ひどい話です。西歐的には、なかなか共生は出てこない。ひとつのことをシステムティックに体系化していく学問が、そもそも共生のなかに入ってこない。共生はどこかで、体系化に対峙する。システム化、合理化、合理主義、線形的思考、1+1は2、それらに共生は反逆するので、なかなか英語のネーミングは難しいし、西歐的概念にならない。しかも、加藤周一が言うように、日本主義者とか日本浪漫主義者というのは、東洋的概念のようでいて、じつは西歐的のピュアなシステム論者、すると、それらがかかげる共生は共死にしかなりようがない。そのことをじゅうぶん踏まえておかなければいけない。

——「いのちの発露」を後押しする

ひとりで、ひとりでに、にもどりますが、その追求が、いのちの発露、あるいはいのちを自覚していくことで、赤ん坊にみられるような未分化な感覚、つまり共感覚、五感がくつついてしまっているような感覚、そういうものを発動するというは、いのちが発動してくるということだと思います。

この点で、小林さんに期待することがものすごくあって、ただし、たぶんオロジーにはならないんじゃないかなあ、と思っています。その点、小林さんどうですか？

小林（芳）：オロジーについて、私の専門であるムーブメント教育・療法で、モトロジーという学問がドイツにあるということ、僕は35年ほど前に知りました。僕のやっているこのムーブメントの領域は、いろんな方たちが集まってくる、雑学というか、総合学というか、いま先生がおっしゃった「雑」がかなり大きなファクターになっています。その中でいろんなものが融合し、いろいろなものが揺れ合う、この「ゆれ」の「ゆ」の大切さを最首先生にお話いただき嬉しく思いました。さきほど紹介した黄色の毛布様の遊具である「ゆらんこ」は、私自身が考案し、業者に作っていただいた遊具です。元々のきっかけは、自分で動くことが出来ない寝たきりの重度重複障害児の方たちを「ゆらしてあげたい」、寝たきりの方たちが、健康と笑顔を見せてくれればという考えから始まりました。共生のための遊具づくりであり、その遊具の活用にムーブメント教育・療法の理論を当てはめることに、僕はこれまでズーッと取り組んで来たこととなります。遊びでなく、要は、それ

を学（オロジー）にするために、また、遊具などものをつくるときにこの「ゆれ」を大事にしているのです。その例の一つとして僕は3つのCという概念を基本軸にしています。

3つのCとは、その一つがCreationのC、創造性とかイメージを支える機能。2つめのCがChallenge 挑戦、冒険やってみいたいという気持ちを支える機能。そして最後のCはCommunityとかCommunicationで、ヒトを結びつける機能となります。さきほどのゆらんこ遊具は、寝たきりの方たちのムーブメント活動にかなり評価されている遊具となっています。すこし説明すれば、あの毛布様マットに乗せて抗重力姿勢でからだを動かしてあげる、それは寝たきりの方には、大きな挑戦となります。それを楽しく声かけや音楽を使いながらゆらゆらを進める。そこに、遊園地としての加速度感覚の運動イメージがふくらみます。ゆらんこ遊具には、沢山の取手がついており、それを持って動かすことで、大勢が関わられます。ひとりじゃなくてヒトとヒトの繋がりのコミュニティが自然に設定出来ることで、楽しさはドンドン増えていきます。障害のある方々の生きる力を支援するには、楽しさの感覚を、人間で取り入れて行くことにあると考えます。最首先生に述べていただきました「ゆ」にまつわる言葉を思いおこしてみると、共生に結びつける遊具づくり、場づくりのヒントになる沢山のことがあることに感動しました。

「ゆらんこ」という名前は、ゆらゆらのゆらとぶらんこから来ています。そういう意味の合成語です。この遊具は、病院や療育センターで、ムーブメントの感覚運動遊具として沢山活用されております。ヒトの感覚運動は脳幹を活性化してポジティブヘルスに役立ち

ます。僕自身が考えている共生の支援は、障害のある方々に利益が与えられる遊具を開発し、それをムーブメント教育・療法の方法で括ることです。運動的遊びの要素をもった活動が、なぜヒトに、特に障害児者に必要かきちんとしたエビデンスを添えて、今日では少しずつ説明できるようになってきました。最首先生は、「雑」から話題を出して下さいました。ちょうど自分が進めている包括的な学問であるムーブメント教育・療法に大きなエネルギーをいただきまして大変嬉しく思いました。また、感覚についてのお話も、要は、ゆれと結びつけていけばあそびにつながるということになるように思いました。心理学者のビューラーは、機能的な快をもたらすものがあそびであると定義しました。彼がいう機能とは、こころのゆれを指していることが解り、僕は、遊びにはもうひとつのゆれがなければならない。それはフィジカルな感覚、身体全体としてのゆれということです。僕自身の定義は、遊びとは機能的快をもたらすものである。その機能は、ヒトの持っている「こころ、からだ、あたま」の全身的な機能が参加する快であると考えています。

——全体を知らない部分がもたらす調和

最首：ゆらす、身も心もゆらす、魂がゆれる。魅せられたる魂というのはゆれているのですよ。そういう状態がいのちというものを実感している。そのひとつのあり方を小林さんの実践にみているのですが、共生というのは、どうしても部分と全体という話になるわけです。部分がてんでばらばらに、他人のことなど考えなくて振る舞っているのに、全体の調和がとれている。ひとりひとり個別のいのちでもありながら全体のいのちでもある。有形

のいのちと無形のいのち、同じいのちがはりついている。その部分とは生物学的にどうか。

理科大の田沼靖一たぬませいいちさんは、死の遺伝子を発見した人です。細胞には、しょうがなく壊れてしまう壊死ではなく、自分でプログラムして死んでいく自殺がある。そういうのをアポトーシスといいます。自分で死の遺伝子を発動させて酵素をつくって、それが自分を解体していく。そのときに一番大事なのは、自分のDNAをばらばらにしてパック詰めすることで、そうしないと、DNAが外に出ていって悪さをするおそれがある。自身のDNAを自分の膜で小胞にして処理する。ヒトの60兆のうちの何百億という細胞が毎日自殺していく。田沼靖一はそれを見ていると、どうしても全体のことを細胞は考えて自殺しているとはか思えない、と言うんですね。しかし部分は全体を全部見通して振る舞っているなどというふうにはならない。しかしどうして細胞は自殺していくのか、どうしてそのようにして全体の調和をとっているのか、その認識がまだ得られていない。その得られていない認識が共生概念です。

——「ゆとろぎ」の世界

また雑に転じますが、日本語に主語がないことと、日本語をしゃべる者の共生概念とはかかわりがあると思っています。ただ、ちょっと紹介しておきますが、世界的にみると、ゆとりとか共生は、アラブ世界のほうにつながるか、ということです。今日もってきた、かたくら片倉もとこさんの『ゆとろぎ』という本。書いてみてください。「ゆとり」＋「くつろぎ」→「りくつ」。まんなかの「りくつ」を引くと、「ゆとろぎ」になる。これがアラビア語でラーハという考えと非常に似ているというので

すね。ラーハという、日がかげってからゆっくりにすぐす時間が一番大事で、何することもなく、お茶を飲んだりする。一方、遊びと訳されるラアブは、子供の遊びであってあまり重んじられない。それから、仕事は、しょうがないからやるもの。そこには近代プロテスタントティズムが興ってきて、労働こそ人間の本質と決める、そのような近現代世界とは違う世界観です。

私自身、どう反省しても、おむすびころりんから外れられない。寝転がって、おむすびが転がってこないかなあとばかり思っている。棚からぼた餅とか。労働することこそが人間だ、というふうにはどうしても定着しない世界がある。そこは、やはり、いのちということ、無為自然ということ、なんにもしないでばらばらに生きているようできて、まったくの秩序が保てるような、そういうあそびの世界がある。ネオコン社会、格差社会は労働を本質とする世界です。野中さんが言っておられたけれど、老人をどうするという問題がある。西谷啓治は、この社会は、使い終わった老人を美しいゴミ箱に隔離して捨てる、それを発明しないかぎりは崩壊すると言う。つまり、裏を返せば、ネオコン、ネオリベ社会は、清潔できれいなくずかご（法律や制度）を用意しているということになる。それをそのまま受け入れるわけにはいかないだろうと思います。ま、老人だからそう言いますけども（笑）。若い人はどうですか？ きれいなゴミ箱用意します？ そういうくずかごを用意したら、たぶん、いのちからくる、身も心もゆるるゆるれ方は全然違ってしまうと思います。

——祭り、いのち、祈り

駆け足でいろんなことを話しますが、たと

えば堂前さんのお話のなかで非常に大事なものはお祭りです。ここに持ってきたのは、1904年生まれのパパーという哲学者の『余暇と祝祭』。薄いですから、読んでみるといいですよ。祝祭とは祈るということであって、祈りがどれだけののちにとって根源的なことか、ということと言おうとする。そして、暇、隙間、これを人間はどうつくりだすのか。今のシステム社会では、放っておけば、この余暇は全部、逃避になってしまう。遊びまでプログラムされて、ひたすら金を使うだけの逃避にしかかかっていない。隙間を取り戻さなくてはならない、ということと言おうとするわけですね。

——「共生」の根本としての「いのち」

堂前さんにそろそろお渡ししますが、このものすごく長時間の企画、多彩な人たちが出てきて、半分がたは知を追求しようとする、半分がたはからだを使おうとする。この両方の間のスラック、この両方が「共生」ということで何をもとめようとしているのか。そこに関係性の、むしろ切り離しが大事になってくる。その関係性の切り離しを自分でやって自分を追い込んでいくのが大事で、ときにそれはとじこもりとかとして出てきてしまうけれど、ひとりで、ひとりでに、というのをどのくらい僕らはモットーにできるのか。他人にかかわるときにそれをどのように自分の哲学にできるのか。

私は物議をかもしぶっかりですけど、学生は徹底的に遊ばせたい。そのところは、徹底的に雑然とさせたいということなのです。しかしそれは今の大学に合わない。システム社会そのもののなかに位置付けている大学は、社会を解体しないかぎり、学生を徹底的に遊

ばせることはできない。そういう気持ちで今の大学を見ているわけです。この社会のなかでは、おまえはただの放任主義じゃないかと言われる。そりゃそうなんです。そう思うけれど、やはり共生とはいのちの問題だということを、一本、筋を通していきたいと思っています。いのちがすべてである。宗教をすべてまとめあげるのも、いのちという概念、あるいは具体のいのちである、そういうふうにして共生、あるいはそれに組みあわせるこのW学科を盛り上げていきたい。あるいは共生科学学会がこれからやっていく、その中心はいのちだろう、と思っているわけです。

——モード2としての「共生学」

堂前：はい、ありがとうございます。冒頭のほうで上野さんが出した共生の^{かんせい}陥穽、落とし穴、まとめる秩序という方向に向かってしまいかねない部分に流されない予防策として、いのちという言葉いただきました。そのいのちというものに、あそびとか、雑然ととか、ひとりでにとか、「ゆとろぎ」とか、そういったものを含みこんだいのちのありかたを見据えておかないと、まとめる秩序に流れ込んでしまう、そういう道しるべを与えていただいたのではないかと思います。

ちょっと話ははずれますけど、マイケル・ギボンズという科学社会論の学者が、学問をモード1とモード2という2つに分けています。モード1というのは普通の大学なんかで学者さんが教えるもので、学問的好奇心によってどんどん知識を蓄積していくんです。そこには一貫した学問の知識を体系化した分野、ディシプリンがあります。

もう一つのモード2というのは、いろんなジャンルの人たちが雑然と集まって、なにか

の課題を成し遂げていくという、イノベーションなんかで使われる手法を指しています。さきほどのオロジーの話を知っていると、オロジーというのはやはりモード1の学問。「共生」を考える学問の枠組みを考えると、やはりオロジーのほうに行ってしまうと、まとめようとする論理の力のなかで、望ましくない秩序に陥ってしまいかねない。今のお話をきいて、もし共生学の学問が、モード2として立ち上げられるのであれば、そのように進めるべきではないかと少し考えました。

本日はみなさん、ありがとうございます。最首さん、お忙しいところありがとうございます。それではまた、司会を野中さんにお返しします。

——閉会のことば

野中：みなさん、ほんとに長い間ありがとうございます。どう考えても、盛りだくさんなのは承知のうえででしたが、お一人お一人に十分な時間がなかったのを、首謀者としてはみなさんにあやまらなくてはならないかもしれません。しかし、少なくともこれが今のW学科の実際ですし、私は希望をいっぱいもっておりますので、ごく一部だけでも感じとれるところがみなさんにあったとしたら、とてもうれしく思います。

私自身が学にこだわっていて、共生学って何、って毎日思っています。まして、共生科学と言われると……。ただ、それを考えている一番の理由は、はっきりいえばモード1のある種、優等生だった私が和光大学に来て、モード1のレベルだと何これと言いたいなかで、じつは10年たつとこっちが教えられているなあ、ということだからなんです。であれば、こっちも本気になって共生しなく

ちゃいけないと日々思っていますが、ただ、それは「学」なのか、と言われると、……そこが悩みどころなんです。それで今日のような、分かったような分からないような投げかけをしましたし、最首さんのお話や今の堂前さんのまとめのなかにピンとくることもありました。

最首さんにいろいろな刺激をいただいたことで、2つだけ余計なことを申し上げます。すでにW新聞の1号をご覧のかたはお読みかもしれませんが、じつは私たちW学科はダブルユー学科。ダブル「ゆ」です。だから表紙に、ユウアンドユウという副題もつけました。その「ゆ」がここに出てくるとは思っていませんでしたので、じつはWというのはなんと先見の明のある選択だったのか、というのが1つです(笑)。もう1つ、最首さんがおっしゃった、「ゆとり」+「くつろぎ」-「りくつ」の「ゆとろぎ」という言葉。理屈、とっぱらっちゃった。でも、ゆとろぎって、結局「ろぎー」じゃないか…。そうすると英語でYutologyってのはあり? ……あ、学生さんは気にしないでくださいね、たわごとです。

最後に個人的な話を少しだけします。改組の前に私たちの学部の名称は人間関係学部でした。個人的には人間関係学部っていいすぐ名前だったなあとと思っています。人間関係に悩む人もいますが、なやんでいるからこそその学部に来た人も多かったようにも思います。でも、私の考えでいうと、自分のところだけじゃなくて、相手のなかのところをみている、それがまた自分にはねかえってくる。そこを勉強したくて来た学生たちの集団だったんですね。私は、人との共生では、相手が

見えていること、相手のところが感じられることを出発点としました。今のW学科の学生さんたちも、そうしたやりとりのなかで、うまく共生する人材に育ってきているなあという人が、どんどんできて、学科長としては楽しみにしています。

今回のシンポジウムの成果を発展させて、近く、学科専任教員を中心に『身体環境共生学入門』といった形で本を書きたいとも考えています。今後ともよろしくお願ひします。

おしゃべりがすぎました。今日は本当にお忙しい中ありがとうございました。ご用とお急ぎでない方は、学祭で活躍する元気な学生の姿もご覧になっていってください。

《参考文献》(登場順)

- 加藤周一『雑種文化 日本の小さな希望』(講談社文庫)、講談社、1974年
 川那部浩哉『曖昧の生態学』、農山漁村文化協会、1996年
 福田定良『私と哲学とのおかしな関係についての告白』、法政大学出版局、1972年
 福田定良『「ひとり」の人間学』柏樹社、1975年
 荒木博之『やまとことばの人類学 日本語から日本人を考える』(朝日選書)、朝日新聞社、1983年
 木下竹次『学習原論』目黒書店、東京、1923年
 田沼靖一『アポトシス—細胞の生と死』(UPバイオロジー)、東京大学出版会、1994年
 片倉もとこ『ゆとろぎ—イスラームのゆたかな時間』、岩波書店、2008年
 西谷啓治、上田閑照(編)『宗教と非宗教の間』(岩波現代文庫—学術)、岩波書店、2001年
 ヨゼフ・ピーパー、稲垣良典(訳)『余暇と祝祭』(講談社学術文庫)、講談社、1988年
 マイケル・ギボンズ、小林信一(訳)『現代社会と知の創造—モード論とは何か』(丸善ライブラリー)、丸善、1997年